

性別に囚われないで

成瀬中学校 三年 瀬戸 柚希

「えっ、女の子なのにサッカーするの？」

そんな言葉をかけられたのは、小学校四年生

のとき。小学校の休み時間にいつも通り友達

と話してるときでした。物心つく前からお父

さんとお兄ちゃんがサッカーをする姿を見て

きた私は、市内の女子チームの試合の助っ人

に行った事をきっかけに、サッカーを始めま

した。だけどその日、同じクラスの友達に言

われた何気ない一言が、私の胸にひっかかり

ました。そのときの私は、笑って流すことし

かできませんでした。でも心の中ではすごく

モヤモヤしていました。「女の子なのに」と

いう言葉は「サッカーが好きなら私」を否定さ

れた気分になりました。なぜ女の子だからと

いう理由だけで、サッカーをすることに對し

て疑問を持たれなければならないのか。そん

な思いが、ずっと頭の中で考えていました。

この出来事をきっかけに、「女の子らしさ」

「男の子らしさ」ってなんだろうと考えるようにになりました。よく、「女の子なんだからもっとおしとやかでいなさい」や、「男の子なんだから痛くても泣くな」などという言葉

を聞きます。けれど、このようない男らしさを「女らしさ」という決めつけは、本当に必要なのでしょうか。

たとえば、私と同じようにスポーツや外で走り回ることが好きな女の子もいれば、裁縫やピアノをひくことが好きな男の子だっています。そういう一人一人の個性を「女らしさ」「男らしさ」の概念で見失ってしまうと、その人の良さや今後の可能性を潰してしまう気がします。

中学校になった今でも、私は小学校の頃所属していたチームから派生して出来たジュニアユースチームでサッカーをプレーしています。あの出来事で一時期はすごく落ち込みました。が、好きという気持ちに嘘をつかずにいることで、一緒になって頑張ることの出来る

最高の仲間とも出会うことができました。最近、
近頃は新しく知り合った人たちに自己紹介する
と、「女の子なのにすごいね」「や」「かっこいい
ね」「などと言われることも多くなりました。
悪気はないと思いますが、まだ「特別なこと
をしている」「と言われているようで、複雑な気
持ちになります。
サッカーをするということは、性別は関係
ないと思います。努力した分だけ実力はついで、
てくるし、仲間と力を合わせてパスを繋いで、
ゴールを奪った瞬間は何にも変えられない達成
感があります。その気持ちには、男でも女でも
同じだと思います。性別だけを見て「似合
う」「似合わない」「を決めつけるのではなく、
その人が「何をしたいか」「何が好きか」が
大事なのだと思います。
人権とは、「性別にとられずに自分らしく
く生きることが出来る権利」である。私は考
えます。たとえどんなに少数派で、まわりの
人たちががつていても、それを理由に、私のよ

うに疑問を持たれたり否定されたり、制限さ
れたりするのにはあつてはならないことだと思
います。自分の思いや考えを大切にし、それ
をまわりと互いに認め合うことで、おたがい
の人権を守り、暮らしやすい社会がつけられ
ていくのだと思います。

私はこれからも好きなサッカーを続けて
いきたいと思っています。そして、これからもし
誰かに、昔と同じように、「女の子なのにサ
ッカーするの？」と言われても、「私はサッ
カーが好きだからサッカーをしている」と自
信を持って答えていきたいと思っています。

さらに、私と同じように、「男の子だけど
ピンクが好きなんだ」「女の子だけど野球が
好きなんだ」と言う人がいたら「いいね、そ
れってすごく素敵なことだね」と自然に言え
るようになりたいと心の底から思います。

性別によつてその人の選択肢をしぼつてし
まうのではなく、一人一人が「自分らしさ」
を生かしながらか、やりたいことに挑戦しなが

ら暮らせる社会。それが本当の意味で人権が
守られている社会ではないかと私は思います。
私はこれからも、性別に囚われている「男
らしさ」「女らしさ」ではなく「自分らしさ」
を大切にしていきたいです。そして、自分も
まわりの人も、互いの個性を尊重して認め合
えるような生き方をしていきたいと思います。